

令和6年度

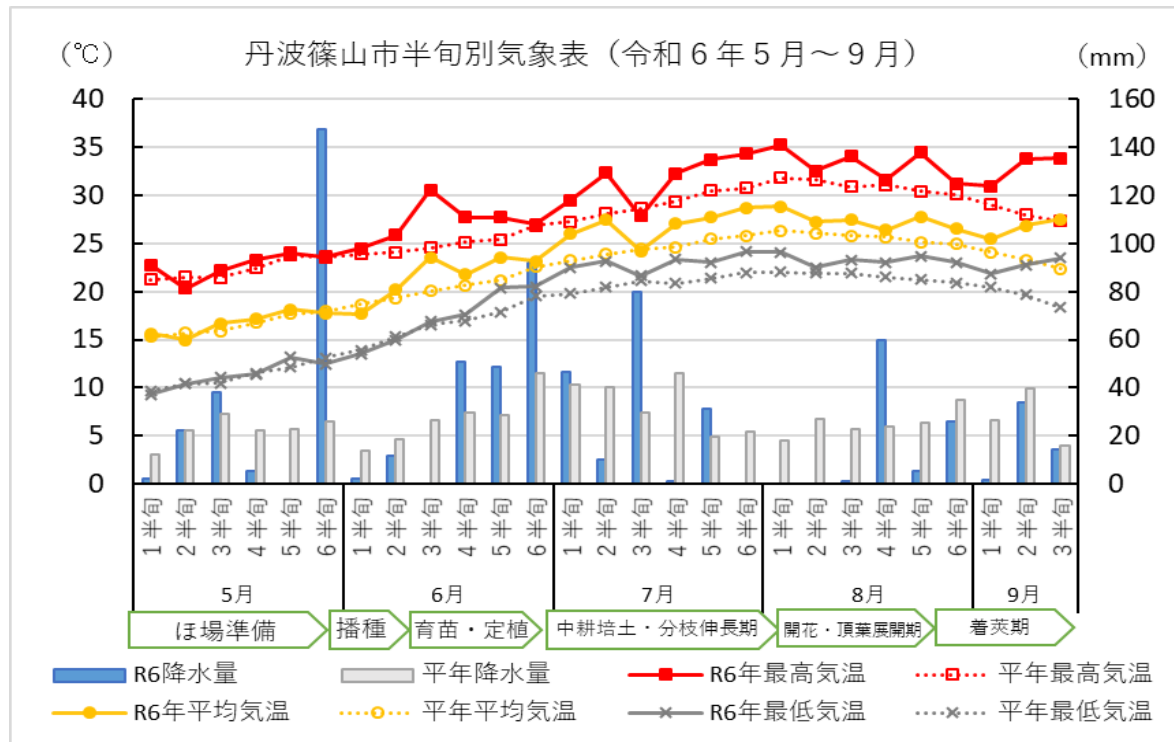
丹波篠山黒豆情報

第3号 令和6年9月 日 丹波篠山市・JA丹波ささやま・NOSAIひょうご丹波篠山事務所・丹波農業改良普及センター

*丹波篠山市内6カ所に調査定点を設置しています。

【気象】

- ・8月以降の開花～着莢期にかけて最高・平均・最低気温ともに平年より高い傾向で推移しました。9月は昨年比べて気温の高い日が続いています。
- ・梅雨明けから8月19日まで降雨がなく、花芽分化～開花期にかけて高温少雨で推移しました。



近畿地方 向こう3か月（09月～11月）の天候の見通し

予報のポイント

- ・向こう3か月の気温は、平均気温は平年より高くなるでしょう。
- ・向こう3か月の降水量は、近畿太平洋側で平年並みまたは多いでしょう。

【生育】（令和6年9月17日丹波篠山市定点調査結果より）

1株当たり着莢数 ※長さが1cm以上の莢を計数 (莢)	
令和6年平均	96.6
平年(過去10カ年平均)	88.4
平年比	109%
令和5年(参考)	78.1

- ・6カ所の1株当たりの平均着莢数は96.6莢で、平年（過去10カ年平均）比109%と平年を上回っています。今年は、地域間に差があり、1株当たり多い地区は176.9莢、少ない地区は61.2莢と、大きな差が見られます。
- ・開花期前半の着莢は少なかったが、定点ほ場では土壌水分計のデータを参考に定期的なかん水が実施されたことによって、昨年より着莢率が向上したと考えられます。

【病害虫】（令和6年9月17日丹波篠山市定点調査結果より）

	立枯性病害	カメムシ類	ハスモンヨトウ	サヤムシガ	アブラムシ類	ハダニ類
	株率(%)	虫数/株	被害株率(%)	被害株率(%)	頭/小葉	頭/小葉
令和6年	4.33	0.00	10.83	0.00	0.00	0.00
平年(過去10カ年平均)	4.87	0.03	10.33	5.83	0.12	0.34
平年比	89%	0%	105%	0%	0%	0%
参考値(令和5年)	1.67	0.03	5.00	3.33	0.00	0.00

- ・立枯性病害（茎疫病、白絹病）の発生が平年に比べて少ない結果となりました。
- ・カメムシ類、サヤムシガなど莢を加害する害虫の発生も平年に比べて少ない状況です。
- ・ハスモンヨトウの被害株率が平年に比べて多い状況です。
- ・べと病、葉焼病、ハダニ類、アブラムシ類が一部のほ場で発生が見られますので注意しましょう。

【今後の対策】

1 着莢・粒肥大期の水管理等

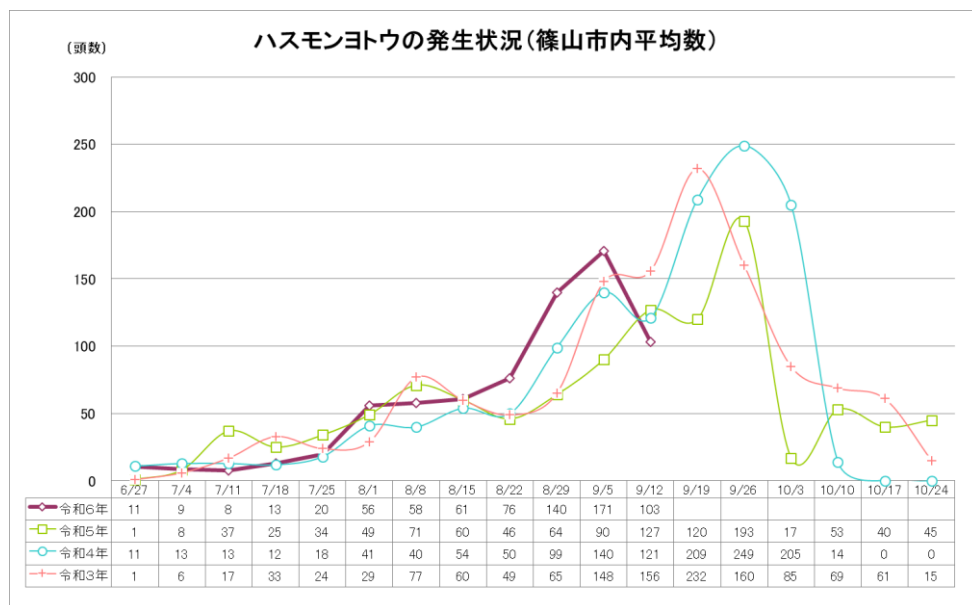
- ・子実が肥大する10月下旬までは水管理が重要となります。晴天が続き、土壌が乾いている場合は、適宜かん水を行いましょう。
- ・湿害や立枯性病害の発生を防止するため、長雨やゲリラ豪雨、台風等により畝間に水が溜まっている場合は、排水対策（排水口を整えたり、排水溝と排水口を確実につなぐなど）に努めましょう。

2 台風対策

- ・台風にもなう風雨により、ほ場の冠水や株の倒伏、茎葉の傷みなどが発生する恐れがあります。不用意にほ場に入ると枝折れを助長するため、注意が必要です。倒伏した株は無理に起こすと折れてしまうため、無理に起こすことはやめましょう。
- ・排水口を開き、排水溝との接続を確実に行うなどの排水対策とともに、倒伏防止のための支柱やマイカー線等の点検を行いましょう。
- ・枝折れした傷口や株の泥の付着した部分から病原菌が侵入しやすくなります。台風通過後、風雨で茎葉がもまれた場合は、斑点細菌病等の予防のため、殺菌剤の散布を行いましょう。

3 害虫対策

- ・今年は8月中旬以降、ハスモンヨトウ発生が多くなっています。毎年9月中旬以降はさらに発生が増える傾向があるため、幼虫による食害を受けて白く見える葉(白変葉)は速やかに除去し、薬剤防除を徹底してください。
- ・カメムシ類、サヤムシガ、フタスジヒメハムシなどは莢肥大期に莢を吸汁、食害し被害が大きくなるため、発生に注意し、定期的な薬剤防除を実施しましょう。



上記の「薬剤防除」における防除薬剤については、必ず「丹波篠山黒大豆栽培こよみ」で確認してください。枝豆出荷する場合は使用時期に注意しましょう。

4 立枯性病害(茎疫病、白絹病)対策

- ・ほ場の排水対策を徹底し、立枯性病害が発生した場合は、発病株を早急に抜き取り、抜き取った株は、土をほ場内で払い落とさないようにしてほ場外に持ち出して処分しましょう。